

文化財学習会

# ふるさと探訪

テーマ 崇徳上皇ゆかりの地  
坂出・八十場周辺を訪ねる

講師 増田 鉄平  
(坂出市教育委員会職員)

平成24年6月24日(日)

共催 高松市歴史民俗協会  
高松市教育委員会

## 1 岩根の桜

崇徳上皇が讃岐にいる間、この桜を慈しみ何度か足を運び愛でたといわれています。

『山高み 岩根の櫻 散る時は

天の羽衣 なづかとぞ見る』

新古今和歌集に掲載されている崇徳上皇の和歌で

す。(詠まれたのは京都です)

### ※ 崇徳上皇の生涯：保元の乱と配流生活

崇徳上皇（元永二年（一一一九）～長寛二年（一一六四））は、第七十五代の天皇であり、一般的には日本三大怨霊の一人として知られています。

鳥羽天皇の第一子として生まれた崇徳上皇（あきひと顕仁）ですが、その出生についても不穏な噂がつきまといまいました。『古事談』こじだんという書物によると、崇徳上皇は実は鳥羽天皇の後である待賢門院と、父である白河上皇の間に生まれた不義の子であり、しかもそれは周知の事実であった、当然それを知っていた鳥羽天皇は、崇徳上皇を「叔父子」と呼びよく思っていなかったと書かれています。



岩根の桜

これは『古事談』のみに見られる記述であります。鳥羽と崇徳の間がうまくいっていなかったことを示す一例とも言えます。

五才で天皇位につき、二十三歳で近衛天皇に譲位、上皇となった崇徳でしたが、この頃政治の実権は治天の君である鳥羽上皇が握っており、崇徳上皇は日陰の存在でした。

天皇位を譲った近衛天皇でしたが、十七才で若くして崩御します（子どももいませんでした）。崇徳上皇は自身の子である重仁親王しげひとが天皇位につくことで、院政を行える

日を待ち望んでいたようですが、次に天皇となったのは、

弟の後白河でした。政治の表舞台に立つ機会を奪われた

崇徳上皇は、同じく藤原摂関家にあつて氏の長者争いを

していた藤原頼長ふじわらのよりながとともに武士たちを集め、後白河方と

二つの勢力が対立します。そして鳥羽法皇の崩御をきつ

かけに保元の乱（保元元年（一一五六））がおこります。

乱はわずか一日で決着がつき、夜襲にあつた上皇方は

敗退することとなります。藤原頼長は敗死、源為義みなもとのためよし、

平忠正は斬首と厳しい処分がされるなか、崇徳上皇も



松山の津

讃岐への配流と決まります。

配流された崇徳上皇は、まず雄山おんやまの麓あたりとされる松山の津に船をつけました。急な配流のため、上皇が暮らす御所はまだできておらず、林田にある綾高遠あやのたかとおの屋敷を仮の御所としました。(高遠の屋敷ではなく、その近くにあった長命寺を仮御所としたという説もあります。)ここで上皇は自らの身の衰れを嘆き、

『ここもまた あらぬ雲井と なりにけり

空行く月の 影にまかせて』

という歌を残したため、この仮御所を雲井御所くもいごしよと呼ぶようになりました。

雲井御所での暮らしでは、周囲の武士を集め射芸を楽しんだり、高遠の娘との間に男子と女子二人の子をもうけたりなど、比較的自由な生活をおくっていたようです。

高遠の娘との子どもについては、男子は府中町、女子は西庄町にお墓とされるものが残っており、それぞれ菊塚きくづかと姫塚ひめづかと呼ばれています。近くには、上



雲井御所跡

皇が使っていた食器類を祀ったといわれる盃塚わんづかもあります。

こうして二年を過ぎた後、上皇は新しく造られた御所に移ります。この御所は府中の鼓岡という場所で讃岐国府の近くに位置し、監視の目も厳しくなっ

たことが想像されます。また御所とは思えないほど粗末に造られていたため、木丸殿このまるでんと呼ばれました。

この木丸殿については、崇徳上皇七百五十年祭が行われた大正二年（一九一三）に、往時を偲ぶため、その雰囲気を模した建物が造られ、これを擬古堂ぎこどうと呼んでいます。

上皇はここで六年を過ごしました。その間、自らの罪を悔い、三年もかけて五部大乘経というお経を写経し、

『浜千鳥 跡は都へ 通へども

身は松山に 音ねをのみぞ啼く』



菊塚



姫塚



盃塚

という歌とともに都へ送りますが、すげなく送り返されてしまったといえます。こうして上皇は、再び都の土を踏むこともなく、失意のうちに四十五歳でその生涯を終えます。

## 2 高照院天皇寺

金華山高照院天皇寺は第七十九番札所であり、十一面観音を本尊としています。もともとは摩尼珠院まにしゆいん妙成就寺というお寺が同所で札所となっていました。明治四年（一八七一）に廃寺となり、高照院が跡を継ぎました。天皇寺という名称は、別当となっている白峰宮が崇徳天皇を祀り、天皇さんと呼ばれていたことに由来するもので、江戸時代の絵図などにはむしろ「崇徳天皇」と表記されています。



擬古堂



摩尼珠院の石碑

### 3 白峰宮

崇徳上皇が崩御された後、甥となる第七十八代二条天皇の命により、上皇を祭神とする社殿が造営されました。これが白峰宮であり、八十場の霊泉に遺体を浸していた際、付近の霊木に毎夜神光が燈った（その後白峰に葬られてからは、上皇の魂が金色の鳶となり、毎日遊びに来たという話もあります。）ということから、別名「明りの宮」とも呼ばれます。

#### 崇徳上皇の生涯：崩御と怨霊伝説

崇徳上皇の死について、はつきりとしたことは分かっていません。『今鏡』では、息子の重仁親王が若くして亡くなったことで心を痛めたことに、その原因を求めています。香川には暗殺説が根強く残り、江戸時代の『讃州府誌』という地誌には、その状況が描かれています。

これによると、五部大乘経を送り返されたことに激怒した上皇は、自身の舌を噛み切った血で大乘経に「大魔王となり天下を乱してやる」と書き付け、さらに竜宮に納



白峰宮

めるとしてそのお経を海に沈めました。そして髪も剃らず爪も切らず、歯は鋭くとり目はららんと輝き、顔色や顔立ちさえ異様なものになっていったとのことです。（このあたりについては、『保元物語』に記述のあることです。）

都では上皇の様子を伺うため偵察を出しました。そしてその事実を確認し、恐れられたためか、二条天皇はひそかに命を下し、土着の武士である三木近安（近保とも）という者に鼓岡の御所を襲撃させ、暗殺したというものです。

上皇は柳の樹の洞に隠れたところを近安に見つかり殺害されたため、殺された場所を柳田と呼び、ここに柳を植えてもうまく育たないという言い伝えも生まれました。

また、三木姓の者は白峯寺しろみねじ（上皇の菩提所がある）に登ってはいけない、紫の衣を着ることを忌む（近安が紫の手綱を用いていたから）、葦毛の馬（近安が跨っていた）は育たない、などの言い伝えがあったとも書かれています。



柳田



病死なのか暗殺なのかはともかく、長寛二年（一一六四）に崩御した崇徳上皇は、その遺体を八十場の霊泉（後述）で保管された後、白峰山しらみねやまへ移送されます。この途中、休憩をとった高家神社たかやじんじやには棺を置いたとされる石が残っています。またこの時、急に天候が悪くなり雷が鳴り響く中、棺を置いた石には血の跡があった、という言い伝えもあります。このことから高家神社の別名を「血の宮」といいます。

上皇の遺体はこの後、白峰山の稚児ヶ嶽ちごがたけにて茶毘だび（火葬）に付されます。この時その煙が山のふもとに留まったため、ここに青海神社おうみじんじや（煙の宮）が創建されました。

また白峰山には御陵が築かれ、その隣の白峯寺には、菩提所とんしょうじでんである頓証寺殿とんしょうじでんが建てられます。これは鼓岡の木丸殿を移したものともいわれます。

のちに西行法師が訪れ、崇徳上皇の霊を慰めたのは、この地でのことです。

以上が地誌や伝承から復元される、崇徳上皇の配流から崩御に至る過程です。

上皇が崩御した直後は、都もあまり関心を払いませんでしたが、死後しばらくして、



高家神社の棺を置いたとされる石

災害や事件などがたて続けに起こったこと、後白河天皇の関係者が次々と亡くなったことなどが、上皇や藤原頼長の仕業とされるなど、怨霊としての崇徳上皇が強く認識されるようになります。こうした意識が『保元物語』や『太平記』などで形として表され、江戸時代の『雨月物語』を経て今に至るまで、崇徳上皇という人物のイメージとして定着しました。

ただしこれは、あくまで一般的な、都である京都から見た上皇の印象であるといえます。実際に上皇が暮らした坂出には、こうした怨霊の側面よりも、都を懐かしみながら寂しい最期を向かえた哀れな天皇を畏れ敬う、というような伝承がより多く残されています。



青海神社



白峯御陵

#### 4 野澤井（八十場の清水）

崇徳上皇が崩御されたのは、まだ残暑の厳しい九月（旧暦八月二十六日）のことでした。

また勝手に葬儀等をするわけにもいかないため、都からの通告を待つ間、遺体が傷まないように気をつける必要がありました。

この問題をクリアするために、遺体を霊泉として既に知られていた八十場の清水に漬けておいたとされ、そこから「野澤井」とも呼ばれるようになったと『綾北問尋鈔』などには書かれています。

#### ※ 坂出に残る最古の民話「悪魚退治の伝説」

八十場の清水が、霊泉として知られるようになったのは、この伝説によるものです。以下にこの民話の概略を示します。

むかしむかし景行天皇の頃、坂出の沖に「江えのうおの魚」という大きな悪魚が現れ、人々



野澤井

を大変困らせていました。そこで天皇は息子の武鼓王タケカイコオウという王子（この人物については神櫛王カングシオウとしたり日本武尊ヤマトタケルノミコトとするものもあります。）に命じ、この悪魚を退治させました。

王子の一行は見事この任務を達成するものの、悪魚の毒気にあてられ倒れてしまいます。その時神の使いの童子が現れ、一行に神水を与えたところ、みな息を吹き返しました。この神水こそ八十場の清水であり、蘇生した兵士の数が八十八人だったことから「八十八」と呼ばれるようになったといえます。（蘇ったということにちなんで「弥蘇場」、兵士の数が八十人なので「八十場」、いや兵士の数は八百人で「八百蘇波」だったのが略されて「八蘇波」（『全讃史』）など、「やそば」の字や細かい由来については様々な説があります。）

さて、退治された悪魚「江の魚」ですが、その頭と尾が流れ着いた場所を「福江」と「江尻えじり」（どちらも坂出にある地名です）と呼ぶようになり、その骨は後に災いを成す元凶となっていたところを、諸国を旅していた行基により薬師如来とされ、「魚御堂うおのみどう」に祀られ鎮魂が行われた、という後日談があります。

ちなみに八十場の清水を持ってきた童子は、福江町にある横潮神社よこしおじんじやの神とされ、白峰山の方から飛来したため、その場所を「稚児ヶ嶽」（崇徳上皇が火葬された場所です）

と呼ぶようになったとされます。

また、討伐に成功した武鼓王は功績としてその地を与えられ、そのまま讃岐に留まり、「さるれおう讃留霊王」と呼ばれる讃岐国の初代の王になった、と民話は続きます。

伝説の範囲を出るものではないため、荒唐無稽な点があったり、ややこじつけに感じられる部分も見えなくはありませんが、坂出の地名の由来を、『日本書紀』に見える人物（日本武尊はもちろん、武鼓王は日本武尊の御子で讃岐の綾君の祖、神櫛王は景行天皇の皇子で讃岐の国造の始祖、と記載されています。）に託し、上手くまとめているのでしょうか。だからこそ坂出の成り立ちを語るものとして、現在にいたるまで語り継がれているのかもしれませんが。

## 5 マナイタ石

白峰宮の西、原っぱの中に大きな加工された石がぼつんと置かれています。この石は幅二メートル



マナイタ石

ル、奥行き一・二メートルの大きさで、石の真ん中に長辺方向と平行な段差が設けられているのが特徴です。これはマナイタ石と呼ばれるもので、もとは城山きやまの城門跡近くにあったものを、大正七年（一九一八）にここまで降ろしてきたものです。これと同じマナイタ石が、城山にはまだ二つほどあります。

## ※ いまだ謎に包まれる古代山城「城山」きやま

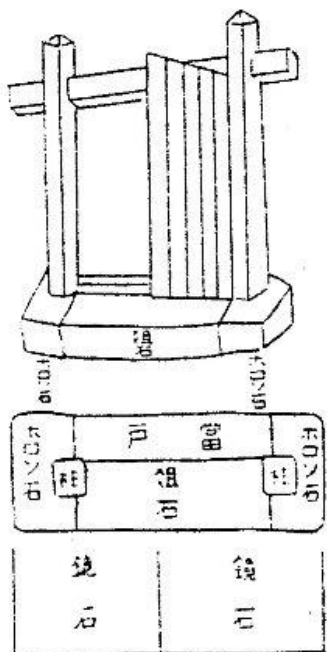
城山は、約一三五〇年前に造られた古代山城と考えられています。この古代山城には、大きく分けて「朝鮮式山城」と「神籠石系山城こうごいし」の二種類があります。「朝鮮式山城」は『日本書紀』・『続日本紀』に記事のあるもので、朝鮮半島に残る山城と似た特徴を持っています。「神籠石系山城」は、前述の文献に記事がなく、かつては祭祀遺跡と考えられていたもので、大きめの切石を用いた列石がひとつの特徴となるものです。しかし、この古文獻に記事があるかどうかで分ける方法では、形態の差異と食い違いがあることも少なくないため、現在では双方をまとめ、「古代山城」と呼称することが多くなっています。（城山は一応、「神籠石系山城」にあたります。）

城山の特徴としては、二重の城郭（土塁や石塁で構成されます）を持ち、その範囲

がかなり広いこと、石造加工物が散在していることがあげられます。

城郭は急傾斜となる山の南・東方向ではあまり確認されていませんが、標高約三百メートル付近と約四百メートル付近に築かれており、ほとんどは土塁です。内郭にあたる標高約四百メートル付近のものでは、一部石積みを用いた石塁となる場所が見られます。

石造加工物は、先程説明したマナイタ石が三つ、凹型をしたホロソ石と呼ばれるものが九つ、ホロソ石と同規模で決りを持たないカガミ石が三つ、それぞれ確認されています。



城門の構

『府中村史』による城門復元図



ホロソ石

これらの石造加工物は、組み合わせで城門の礎石となる、という考え方が古くから示されていますが、他の古代山城で見つかる物と少し形態に差異があること、それが異なる場所で見つかっていること等、今のところ断定には材料が不足しているといえます。

城山には他にも、城門跡（門があったと思われる左右の石積み（整形された切石が使われています。）が残っています。）、水口みなぐちと呼ばれる水門跡などが残っています。



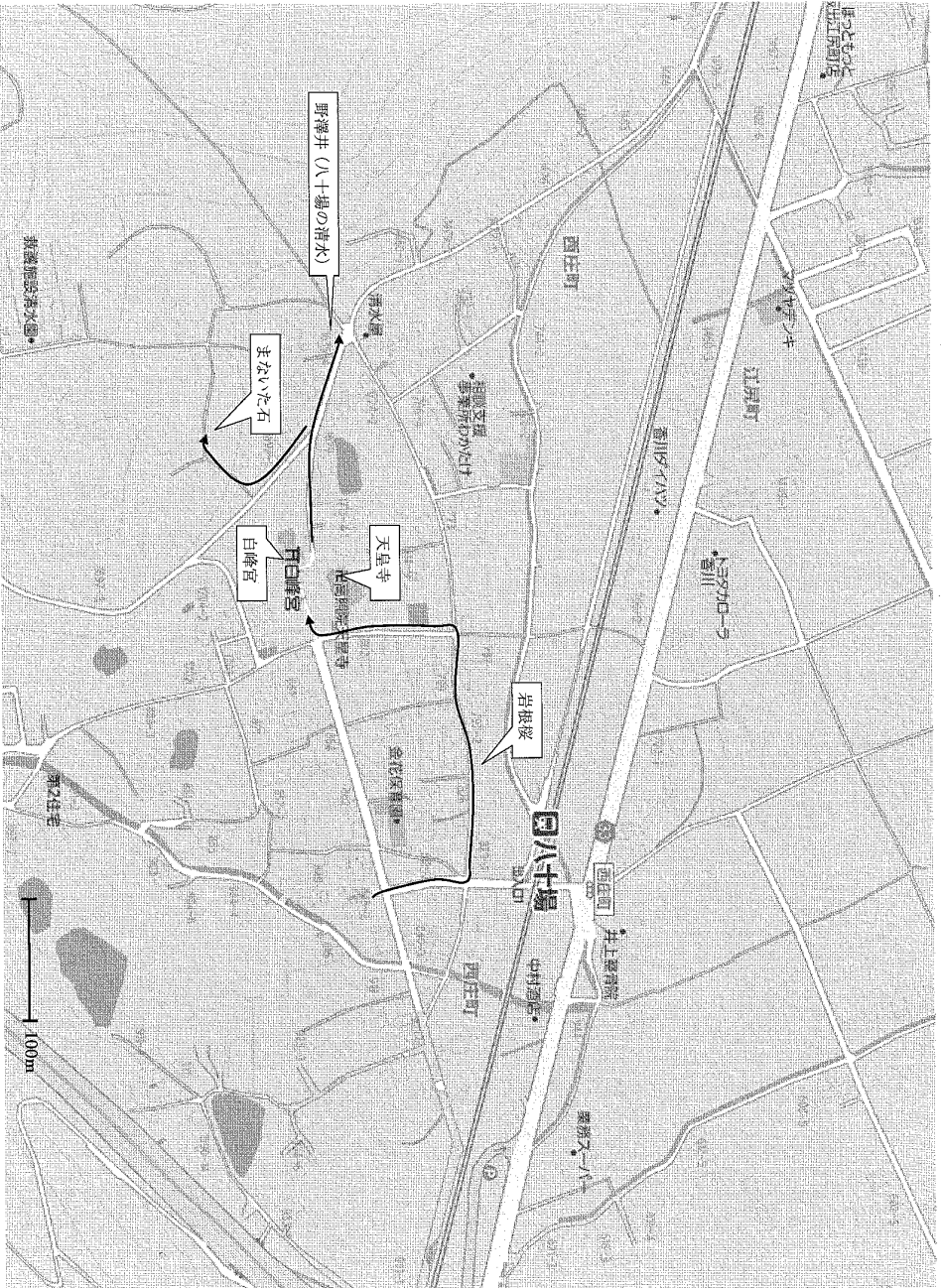
水口



城門跡



また、城山長者の伝説という民話の舞台にもなっており、このなかでは土塁を車が通るための道と説明されています。しかし本格的な調査が行われたことはなく、正確な遺構配置はどうなのか、いつの時期のものなのか、といったことについては、いまだに明らかになっていません。



【参考文献】

- ふるさと発見部会『子ども風土記「坂出の歴史」』坂出市教育研究所 1991
- 坂出市史編さん委員会編『坂出市史 資料編』香川県坂出市 1988
- 栗林三郎『府中村史』1963
- 香川県教育委員会編『新編 香川叢書 考古編』新編香川叢書刊行企画委員会 1983
- 中山城山『復刻讃岐叢書（第一）国譯全讃史』藤田書店 1972
- 丸亀藩京極家編纂『復刻讃岐叢書 増補西讃府志』藤田書店 1973
- 増田休意『讃州府志 全』香川新報社 1915
- 『日本古典文学大系 36 太平記II』岩波書店 1962
- 『新日本古典文学大系 43 保元物語 平治物語 承久記』岩波書店 1992
- 『新日本古典文学大系 41 古事談 続古事談』岩波書店 2005
- 香川県教育委員会『讃岐の歴史と文化の散歩道② - 坂出・綾歌地区 - 』1994
- 磯野實『白峯伝承撰歌集 西行法師のみち歌碑群とその解題』
- 西行法師のみち整備促進協議会会長鎌田正隆 2004

6月24日（日） 坂出市西庄町からの復路

JR八十場駅

（八十場駅）

12：02 発 →

12：29 発 →

（高松駅）

12：25 着

12：52 着



次回のふるさと探訪は・・・

テーマ 六万寺周辺を訪ねる

とき 平成24年9月30日（日）

9：30～12：00

集合場所 未定（9月15日号の広報たかまつ，高松市ホームページでご確認ください。）

講師 小川 太一郎さん（市文化財保護協会副会長）

☆広報「たかまつ」9月15日号に開催案内を掲載しますので，ご覧ください。

☆小雨決行。警報発令等により中止の場合のみ，文化財課（TEL 839-2660「午前7時30分～開始時間まで」）でお知らせします。（電話が通じない場合は，「実施」です。）

★集合場所への交通案内★

ことでん電車【志度線・下り】

（瓦町駅）

（六万寺駅）

8：26 →

8：48

8：46 →

9：08

9：06 →

9：28



## 「ふるさと探訪」に 参加される皆様へ



※ 参加中は、次のことに充分留意し、  
安全で意義のある探訪としましょう。

- 1 交通ルールを守り，交通安全を心がけましょ  
う。  
(必ず歩道を歩き，歩道が無いところでは，道路  
の端を一列で歩きましょう。)
- 2 無理をせず，体調には十分気をつけましょ  
う。
- 3 引率者の指示に従い，整然と行動しましょ  
う。
- 4 マナーを守り，他人に迷惑がかからないよう気  
をつけましょ  
う。
- 5 文化財や自然を大切にしましょ  
う。